

23 近代中国における西洋解剖学の初期的伝播について

松本 秀士^{1,2)}, 坂井 建雄²⁾

¹⁾立教大学文学部文学科文芸・思想専修, ²⁾順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学

イギリスの医療宣教師ホブソンが編纂した『全体新論』(1851)は、近代中国にはじめて西洋の解剖生理学をもたらしたとされてきた。同書は多数の西洋の解剖図を掲載することから、視覚的側面で当時の中国に大きな影響をもたらしたことで重視されてきた。しかし、その実質的内容を精査すれば、医学の専門書としてではなく、あくまで教養レベルで西洋の解剖生理学を概括したものであった。

当時の他の医療宣教師達は、『全体新論』があくまで西洋の解剖生理学の概要を紹介したものであり、基礎医学のテキストとして通用する専門レベルでの解剖学書が、いまだ中国にもたらされていないことを批判していた。このことを受けて、アメリカの医療宣教師オスグッドが『グレイ解剖学』等をもとにして編訳したのが『全体闡微』(1881)であった。これまでホブソンの編纂した『医学英華字訳』(1858)が、近代中国における解剖学用語の中国語訳を整備する役割を果たしたと思われてきたが、その内容を精査すれば書名が示す通りに、西洋の解剖学で用いられるおおよその用語を中国語で説明することに主旨があり、訳語を定義したものではなかった。一方、『全体闡微』では解剖学用語の中国語訳が詳細に定義されており、この点でも同書の果たした役割の重要性が指摘できる。

次に『全体闡微』で定義された解剖学用語の中国語訳を用いながら編訳された生理学書が、アメリカの医療宣教師カーによる『体用十章』(1884)であり、トマス・ヘンリー・ハクスリーの生理学書を原書とするものである。

特に漢字文化圏において、西洋の nervous system (神経系) の概念は全く新たなものであり、これが如何にして中国に伝わったかは医史的に重要な意義をもつ。『全体新論』の伝えた解剖学的内容の最大の特徴は、脳神経を九対と数える旧説に従っていることである。そして、脳神経を十二対と数える新説をはじめて中国に伝える役割を果たしたのは先の解剖学の専門書『全体闡微』であり、生理学書としては『体用十章』となる。後には、イギリスの医療宣教師ダッジョンも『グレイ解剖学』を主な原書として、『全体通考』(1886)を編訳するが、先の『全体闡微』よりも古い版本に基づくもので、最新の発生学に関する内容は記されていない。そして、『全体通考』の中では脳神経を九対と数える旧説を主に伝えており、この点においても『全体闡微』の果たした役割の重要性が指摘できる。

一方、中国で『全体新論』が広く読まれたことを受けて、日本でもその和訓本(1874)が刊行され、原書同様に脳神経を九対と数える旧説を伝えている。脳神経を十二対と数える新説はすでに1872年刊行の『解剖訓蒙』『虞列乙氏解剖図』等によって伝えられており、この点で日本における『全体新論』の役割は小さかったと考えられる。そのことは、先のハクスリーの生理学書を原書にして小林義直が訳した『生理提要』(1876-77)をみることも等でも伺うことができる。同書は和訓本『全体新論』の直後の刊行ではあるが、脳神経については『全体新論』の伝えた旧説の影響を受けることなく、ハクスリーに従って十二対と数える新説を明確に伝えている。このことは、和訓本『全体新論』が原書にある中国語に従って nerve を「脳筋」「脳気筋」と呼称していること、原書が脳神経九対の各名称に対して熟語としての中国語訳を与えていなかったことから、必然的に脳神経九対を熟語としてではなく、文章として説明したことによると考えられる。

以上のように、漢訳医学書等で伝えられた解剖学的内容を中心に検討することで、近代中国に起きた西洋医学の初期的伝播における医史的意義の一端を明らかにする。